

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK300406
種別	追悼
タイトル	宮島さんの思い出
Title	Memories of Dr. Miyazima
著者	石綿 敏雄
Author	ISHIWATA Toshio
掲載号	30巻4号
発行日	2016年3月20日
開始ページ	235
終了ページ	236
著作権者	計量国語学会

追悼

宮島さんの思い出

石綿 敏雄 (国立国語研究所名誉所員)

宮島達夫さんが国立国語研究所の書きことば研究室にはいつ目立って変わったことは、議論の時間と内容がふえたことだった。議論は主として水谷さんと宮島さんのあいだで行なわれた。互いに相手の手のうちをよく知りあっていたようで、無意味に長びくことはなかったが、言うべきことは言うという感じだった。私は黙って聞くばかりだったが、とても勉強になった。

宮島さんはどちらからかといえばデータをいじっているのが好きだと自分ではいつているが、理論的な本もよく読んでいた。西欧の言語学が音韻論や文法論に長じているのに対して、語彙論についてはソビエト言語学が熱心に取り組んでいることを、親切に教えてくれた。それは政治的なイデオロギーとはまったく関係のないことだった。二人でロシア語の論文を読んだこともあった。ロシア語でまとまった論文を読むのは私にとって初めての経験だったし、語学力も大差があつて、私としては教えてもらうことばかりだった。でも「現代雑誌九十種の用語用字」の分析編で、同じ語か異なる語かの問題の説明のなかに、その問題を考えるときに参考にしたロシア語の本の名を私は書き込むことができた。

「現代雑誌九十種の用語用字」の分析では宮島さんは辞的な表現を、わたしは語種品詞のことを取りあつたが、宮島さんが、二人のデータを合算すると活用形の分布が調べられるという。私はデータを渡して処理してもらった。できあがったものを見ると、なるほどと感嘆した。なるほど、というのは、彼がデータの性質をよく知りぬいていて、そのデータ分析についての彼の着眼点の鋭さ、深さ、広さに気づいたときの私の感嘆の声である。その後の宮島さんのしごとは数限りなくあるが、そのいずれにも、私は感嘆のしどおしだった。つい最近でも古典語の生活語彙の世界をエクセルを使ってみごとに再現してみせてくれた。真田治子さんの文章を読んでいいたとき、宮島さんの動詞用法の記述が結合価の研究につながっていることを知ったが、これはあとから気づいたなるほどである。

宮島さんの研究は現代日本語の語彙構造からはじまって社会言語学的な考察や、近・現代語の歴史的な変化、さらには古典語の世界へと次第にその領域を広げていったように思われる。そのなかで、私がおの結果を利用させてもらったものは数が多いが、ここではその一つを例としてあげてみる。それは国語研論集に収められた「現代語いの形成」である。現代の主要・重要語がいつ日本語の歴史のなかで現出したのかを一つひとつつきとめ、日本語の語彙がどのように形成されていったかを計量的に捕らえようとした研究である。近代以降の分については、明治時代に漢語が増加したが、大正以後増加の主役を外来語にゆずったという結論が出ている。外来語の歴史についてはかつて榎垣実さんが研究を行ない、その成果を発表している。それによれば明治以後を明治前期、明治後期、大正期、戦前昭和期と並列的に並べていたように思う。私は小著でこの取りあつかいについて少しも迷うことなく明治期と大正戦前昭和期の二つに分けた。宮島さんの日本語の語彙の動きを大局

的にとらえた見解にしたがったのである。

この「現代語いの形成」については後日談がある。私のところに宮島さんからの相談の手紙が届いたのはずっとあとになってからのことであるが、彼は日本語について行なったこの方法をフランス語に適用して、フランス語の語彙形成を見とおそうとしたらしい。すでにぼうだいな作業をすませてあるという。私は手もとにあった日本フランス語学会員の名簿をコピーして送り、もと計量国語学会員として活躍した木下光一さんの名を挙げて推薦した。そしてその活動範囲の広さと、その実行エネルギーの豊かさに驚嘆した。

1973年、宮島さんはドイツのポッフム大学で働き、私はフランスのグルノーブル大学で働いていた。ドイツに来ないかとのさそいを受けて、所用もあって私は妻と幼い娘とを連れてドイツに出かけた。宮島さんは奥さんとわが家の娘より少し上の二人のお嬢さんとして出むかえてくれた。遠い異郷の地にあつて二つの家族の会合ができたのである。時は春ドイツは緑一色に輝いていた。宮島さんも若かつた。その日の会合が楽しかつたことを、幼い娘はフランスにもどつてからも、思い出しては反芻していた。

いま、その訃報に接し、ただ悲しむばかりである。心からおくやみもうしあげる。

(2016年1月18日受付)